私のテーマ

博物館教育
歴史資料を「鑑賞」する?!

河村　章代

「私が?」―本稿の依頼への私の第一声です。私は、学芸専門員という職名で坂本龍馬記念館に勤務しておりますが、歴史学専攻ではなく（美術〝史〟専攻ではありましたが…）担当業務も企画広報、教育普及です。そんな私に、なぜ白羽の矢が…。

「鑑賞」とは「深く味わう事」

聞けば、渋谷先生がご推薦くださったとのこと。先生と初めてお会いしたのは15年ほど前、私が県立美術館に勤務し、開館10周年記念の展覧会「河田小龍―幕末土佐のハイカラ画人」展を担当した頃、先生が小龍の資料調査にお見えになった時と記憶しています。渋谷先生のご推薦なら……と畑違いは承知の上ですが、謹んでお請けした次第です。

さて、その「河田小龍」展会期中、アメリア・アレナス氏による対話型鑑賞についての講演会がありました（アレナス氏は対話型鑑賞の第一人者です）。対話型鑑賞とは、作品の解釈や知識を「一方的に」鑑賞者に教えるのではなく、鑑賞者の感想や意見を重視し、他者とのコミュニケーションをはかる…という鑑賞方法で、当時は（現在も）各地で盛んに研究、実践がされ、筆者も出前授業などで行っておりました。

もうおわかりでしょう、私の研究テーマは博物館教育、主として鑑賞教育、なかでも「対話型鑑賞」に興味をもっています。対話型鑑賞は主に美術作品を対象に、作品の「解説」より、鑑賞者自身が「どう感じるか」を大切にし、作品鑑賞を通じた参加者間の交流を大事にする鑑賞法です。画面に見えるもの等を各々発言することから始め、意見交換にすすみます。他者の発言に「なるほど」「そうかな」と思いながら、自分の考えを深めていきます。鑑賞を通じて、色々な感想や意見を聴くことで、「自分とは違う意見の人がいる」ことに気づき、認め合うことから、対話型鑑賞は観察力や批判力、コミュニケーション力を育むことができるといわれています。

「鑑賞」とは「深く味わうこと」です。作者や制作年を覚えることではありません。つまり、「鑑賞」に必要なのは「自分で感じる、考える力」ではないかと思います。「わからん」も、自分がそう感じたなら鑑賞です。歴史資料は美術作品とは違う、鑑賞は無理、とも言われますが、歴史資料も美術作品も「何が見えるか、どんな感じを受けるか」を入口に「深く味わうこと」は可能ではないか、と筆者は考えます。龍馬の書簡をみて、内容はわからなくとも「味わいのある字」と思ったら、それは「鑑賞」だと思います。そこから、現代語訳を読んだり、読めそうな字を探したり、紙の長さや署名の違いを他の資料と比べたり…色々な楽しみ方ができるでしょう。その時にファシリテーターや他の人との対話を通じて資料の面白さを発見していく、というのが、歴史資料での対話型鑑賞となるのではないでしょうか。そこで興味を持ったうえで、内容や時代背景を自分で調べると、人の解説をただ聞いているときよりも10倍頭に入るのではないかと思います。

ひとり対話型鑑賞

そうとはいえ、鑑賞に知識や情報は全く不要とは決して思いません。知識や情報があればより深く味わうこともできるでしょう。ただ、それだけに頼ると、知らない資料に出会うと「わからん、無理」と思考停止してしまうのではないかとも思います。それはもったいない！それよりも、自分の知らない資料を前にしたとき、自分の五感と想像力をフル回転させる技、情報収集する技、ほかの人の感じ方や意見にも耳を傾け、できれば意見交換できる技を持っているほうが、楽しく見ることができると思うのです。その技をみがくのが「対話型」だと思います。ひとりで見ている時でも、頭の中で「ひとり対話型鑑賞」をしていくと、鑑賞の楽しみがぐんと拡がるのではないでしょうか。つまり、対話型鑑賞を入口に資料への興味、関心を深めてもらいたいと思うのです。

常設展示室のたくさんの龍馬の書簡―見る人の感性や情報量、龍馬ファン度によって感じ方は千差万別でしょう。知識や情報を得るだけなら書籍でもできます。博物館ならでは、の資料を実際に見たときの感覚を大切にしながら、感性と知性のバランスをとった博物館の楽しみ方、歴史に親しむ入口として、歴史資料の「対話型鑑賞」がなんとかできないかなあ、と日々考えています。

県美の学芸員時代、来館した小学生と一緒に収蔵作品を鑑賞しているところです。（写真提供：高知県立美術館）

ハブ機能」を担う館へ

求する～　龍馬記念館 館長 高松 清之 さん

高松清之館長さんは、「やり手の県庁マン」だったと思う。挨拶などをお願いした時に「何分ぐらいの挨拶をしたらいいかな？」とすぐに聞き返されることなどから直感的に感じる。「あ、だったら原稿用紙３枚分ね。了解。」と。

2016年春、館長就任後２か月ぐらいの時に、龍馬関係のある団体の会合で講師を務められたことがあった。講話の中身は「坂本家と高松のつながり」といったもので、ご先祖様と龍馬、そしてご自身の繋がりという興味深い内容で30分ほど述べられた。できれば現代龍馬学会の研究発表会においてもぜひお願いしたいと考えている。きっと、その時も「40分かね。じゃあ、原稿用紙20枚かな。」と即答されることだろう。

高松館長と龍馬記念館

―― 高松館長にインタビューをした。就任3年目、新館の建設、2018年4月21日のリニューアル・オープン。続いて6月16日には、わずか2か月足らずで「入館者5万人を達成」。9月1日には「10万人に到達」、それより前の7月15日には1991年の開館以来27年目で「400万人の入館者達成」と記録続きの毎日の中でインタビューに応じてくださった。（聞き手：宮英司）

高松館長と龍馬記念館との接点を尋ねると、間髪を入れずに、県庁勤務時代の観光部副部長職の折（2008年）、NHK大河ドラマでの「龍馬伝」の放映決定のことが出てきた。その決定にあわせて駅前パビリオン・幕末志士社中の建設、そして「土佐・龍馬であい博」の企画・準備等を挙げられた。そういえば、この時期の龍馬記念館はすさまじい入館ラッシュだったと聞く。通常の入館者が年間12～13万人のところ、放映の前年（2009年度）が約25万人、放映年（2010年度）が44万人、翌年（2011年度）も約23万人だったというから驚きだ。

高松館長のご先祖様の話

龍馬が敬愛したという高松順蔵（龍馬の長姉・千鶴の夫）さん。その弟・高松勇蔵さんの末裔にあたるのが館長さん。高松家9代・郷士初代の高松平次右衛門清廉から数えて17代目、勇蔵清則から数えると5代目になるという。

高松順蔵は「いごっそう」だったらしい。儒学者としての力もさることながら、和歌や剣にも優れていたという逸話が残る。容堂公からも招聘の話があったが応じず、弟の勇蔵に家督を譲って隠居してしまったらしい。また、順蔵の次弟・濤亭（とうてい）さんも華岡青洲の門下生であり、長崎でオランダ医学を学んだ優れた医者であったという。城下で開業し、お抱え医の話もあったが、彼もまた固辞して安田に帰ったとのこと。高松にはどうも「いごっそう」が多いようだ。

勇蔵さんは、館長から遡ること4代。おじいさんのおじいさんという関係。（別掲：家系図参照）。「歴史の専門家でもない私に龍馬記念館の館長に就任せよということは、そうしたご縁だったということなのか…。」という館長のつぶやきに繋がる。

新装なった龍馬記念館

高松館長に新しい記念館のイチ押しを尋ねてみました。

①常設展示室

龍馬の真筆をはじめ本物の資料が数多く並ぶ展示を実現した。幕末動乱の始まりから龍馬の死までを順番に眺めていくことができる。いつの間にか、幕末の学習が進み、龍馬の思いが伝わってくるような展示になっている。ぜひ、時間をかけて見学していただきたい。

②海の見える・ぎゃらりい

太平洋を眼下に見下ろす最高のポイント。観覧の半ばで少し休憩をしてもらうのにも最適の場所。ゆったりと太平洋を眺めているといつの間にか疲れがとれていく。

③幕末写真館

幕末を生き抜いた人々の写真をよくあれだけ集められたものだと感心する。学芸員の苦労も並大抵のものではなかったと思う。残念ながら図書への収録や来館者の方々が撮影する許可をいただいていないので、この幕末写真館で眺めていただくしかないが、歴史通の方でも何人かは全くの初見の方がいるはず…。

話題人インタビュー

「龍馬研究のハ

～龍馬との関わりを追

新しい龍馬記念館の使命

初代の小椋克己館長が「龍馬の入り口」を創った。二代の森健志郎館長が「龍馬の殿堂」へと発展させた。次は、「龍馬研究のハブ機能」を担うことのできる館に成長させていきたいと抱負を語ってくださった。（ハブ＝活動の拠点）

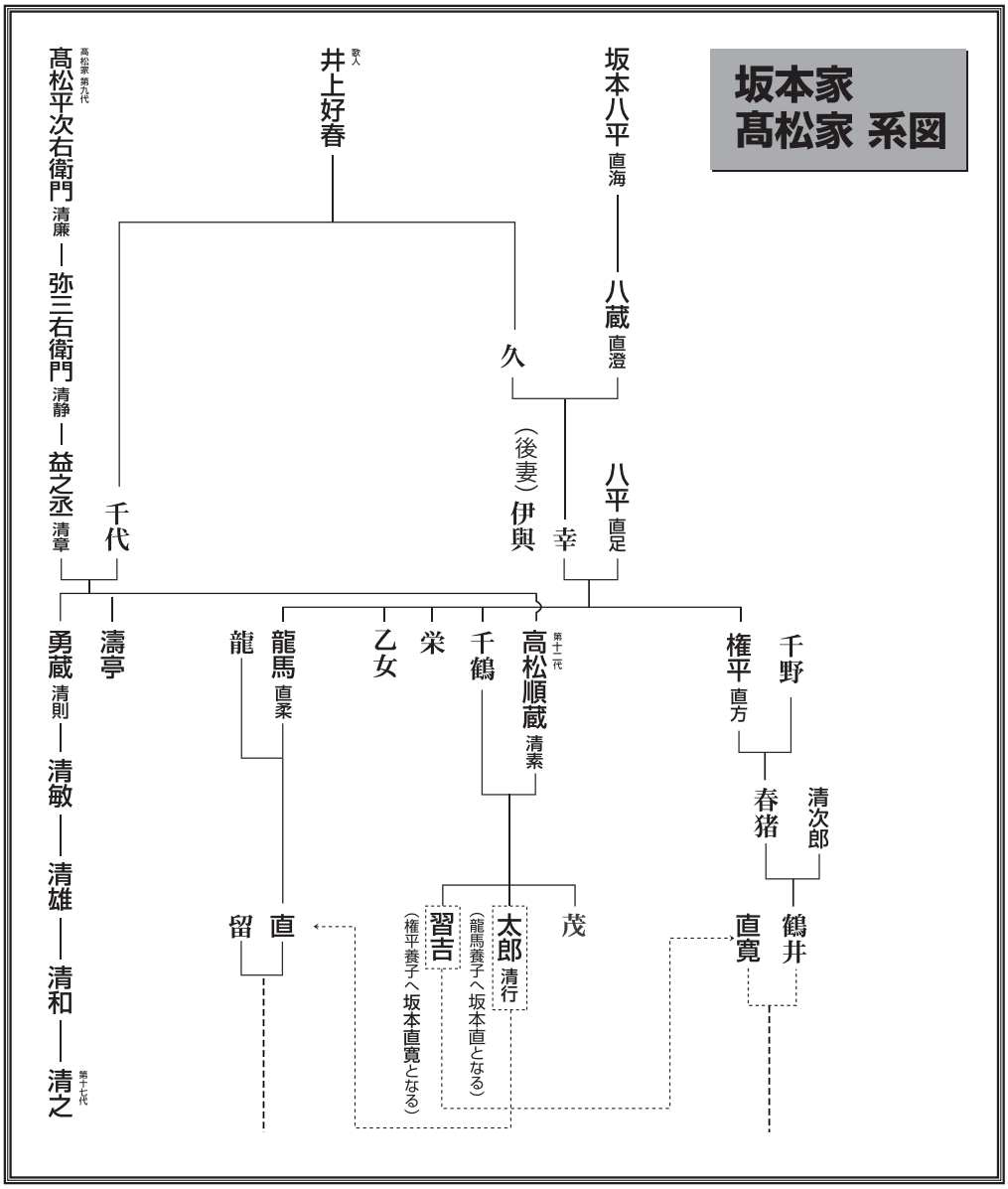
これからの記念館は質量ともに高いものが求められる。これまで「博物館類似施設」だった記念館は、今回のリニューアルを機に、「博物館相当施設」となった。

開館当初（1991年）、所蔵資料は30点くらいだった。2019年2月現在は1100点以上となっており、資料のデータベース化も進めている。また今後は、学芸員の体制もさらに充実させて、これまでの蓄積を活かしつつ、博物館としての活動を広く、深くしていきたい。

現代龍馬学会のみなさんへ

現代龍馬学会のみなさんには、記念館とともに、これまでとは違う新しい展開を考えてほしい。また、龍馬学会だけでなく、各地の史談会やいろいろな歴史関係の会はさらに裾野を広げていかなければならない時期に差し掛かっていると思う。龍馬学会も頭に「現代」がついている意味を考え続けていくことが大切だ。幅広く、間口を広げて龍馬との関わりを追究する。学会設立の精神に立ち返って、会員一人ひとりが自らの役割を確認していくことも大切だろう。これからも総会・研究発表会だけでなく、理事会や例会を通じて会員相互の交流を活性化させていきたい。

※龍馬記念館も現代龍馬学会も、新しい時代を迎えました。高松館長さんの先を見通したお話を参考にして確かな歩みを進めていきたいものです。



☆**高松 清之**（たかまつ・きよゆき）

1953年　高知県生まれ
中央大学法学部卒業
1976年　高知県庁に入庁
農林部、総務部、企画部等を経て、人事企画課長、政策推進課長、観光部副部長、商工労働部長、危機管理部長を歴任。
2014年　高知県庁を定年退職
2014年　高知県信用保証協会会長
2016年　高知県立坂本龍馬記念館長に就任。

profile

こぼれ話 ― 犬歩棒当記（三十七）―

『幕末太陽傳』のこと

宮川 禎一

お正月前後に放送された古い映画を録画して、休日にまとめて観たのだが、『幕末太陽傳』が面白過ぎたので、用意していた原稿を飛ばして、この映画について書きたい。日活が昭和三十二年（一九五七）に制作したこのモノクロ映画は筆者が生まれる前、もう六十年以上も前の作品だが、日本映画の名作ランキングで常に上位にあるものだ。しかし名前を知っていただけでこれまで観ることがなかったのが自分史的に悔やまれる。

江戸の古典落語のいくつかを題材に、文久二年の品川宿の「相模屋」という遊郭でくりひろげられる軽快な人間絵巻だ。フランキー堺が主役だが、こんな役者だったのかと大いに感心させられた。御殿山の英国公使館の工事現場を焼き討ちする長州藩士らも登場する。若い石原裕次郎が高杉晋作を演じているが、はっきりいって添え物だ。戦後の作品らしく反長州的な匂いもある。なんといっても時代劇全盛時代の良さが溢れている。遊郭の豪華なセットや品川の海辺、食物調度小物、着物をさっと着る俳優の所作にいたるまですみずみに神経がいきとどいている。幕末の遊郭に本当に居るようだ。私のような昭和後半世代から見ればベテラン女優だった方々も皆さん若くて美しい。道で背伸びする野良犬も名演技だ。面白いだけでなく何か人間の哀しみをえぐる部分も伝わってくる名作である。

映像に携わる人ならこの映画の影響を必ず受けたはずだ。その代表例は宮崎駿の『千と千尋の神隠し』の湯屋であろう。また昨年の大河ドラマ『西郷どん』でひー様（一橋慶喜）と西郷吉之助がやりあう遊郭の設定にも影響があったはずである。

すでにこの映画をご覧になっている方々からは「今頃遅いんだよ」と言われそうだが、まだ観ていない人に言いたい。「面白いです。御覧下さい」と。

「東海道五拾三次之内　品川」
歌川広重画　19 世紀前半

コラム・龍馬のこと

「磊落な龍馬」

竹内 土佐郎

坂本龍馬と言えば、中岡慎太郎と共に東奔西走して薩摩藩の西郷隆盛、長州藩の桂小五郎らの大物を動かし、薩長同盟を成立させ新しい明治の時代をもたらしたことに思いを馳せる。

龍馬の討幕への始まりは、指導者武市半平太の土佐勤王党に入党してからである。同志坂本龍馬と中岡慎太郎の二人が武市半平太の家を訪れた時の逸話がある。半平太の妻富子が言うには「慎太郎さんは、大変に行儀のよい方で部屋に通られても容姿を崩されたことはなく、柿などをむいて勧めても辱のうございると言われるだけで、手を出そうともされなかった。それに比べ坂本さんは、たいそう無遠慮な方で、こちらが勧めもしないのに勝手に取って、皮もむかずに食べられる方でした」と。また或る日のこと、龍馬が半平太の家の庭先で放尿しているところを見た富子は、半平太に注意をと言うと「放っておけ龍馬は国を動かす男だ」と言って何も言わなかった。龍馬は磊落で、慎太郎は実直な性質の持ち主であったようである。

龍馬は、身分差別の激しく保身的な幕藩体制を崩し、民主的な新しい国づくりを考えていたのである。その為に龍馬は「薩摩藩と長州藩との同盟を実現させ、強力な討幕勢力を作りたい」という大きな目標を持っていた。今の幕府には、この国の舵取りはできない、薩長同盟を何んとしてでも実現させて大政奉還にもっていきたいと強く思っていた。龍馬は慎太郎と尽力した会見が一度は失敗したが、西郷によく話をして了解いただくことになった。

慶応二年（一八六六）一月二十一日、薩摩藩の西郷と長州藩の桂は、密約を交わして薩長同盟は成立したのである。

これも磊落な龍馬の社交術と行動力によるものであった。

第11回
高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会 研究発表会

テーマ　**「龍馬の生きた時代を考える」**

日　時　2019年5月25日(土) 10:00～17:20（会員総会9:20～）
会　場　高知県立坂本龍馬記念館 新館ホール
定　員　120名（参加無料・要申込）

【特別講演】10:10～
宮川 禎一 氏（京都国立博物館 上席研究員）
「寺田屋登勢と坂本龍馬 ― 登勢の手紙の真意 ―」

【研究発表】
11:40～　亀尾 美香 氏（坂本龍馬記念館主任学芸員）
「岡崎菊右衛門日記にみる幕末の土佐」
14:00～　今井 章博 氏（高知近代史研究会会長・土佐史談会副会長）
「龍馬十五年忌祭をめぐる元海援隊士達の動向（仮題）**」**
15:00～　佐竹 敏彦 氏（龍馬脱藩祭代表）
「龍馬のこころを伝えたい」
16:10～　広井 護 氏（土佐中高等学校国語教師）
「『竜馬がゆく』のスリルとサスペンス」

参加ご希望の方は現代龍馬学会事務局までお申込みください。

【お申込み・お問合わせ】
高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会事務局
電　話　088-841-0001　　ＦＡＸ　088-841-0015
ＭＡＩＬ　gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒 781-0262 高知市浦戸城山 830
TEL (088) 841-0001　FAX (088) 841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp